

序

これまでの集中治療は、重症患者の救命に主眼が置かれていました。もちろん患者の救命が第一なのは今日でも変わりはありませんし、これからもその優先順位が変わることはないでしょう。しかし、現在の集中治療はそれのみにとどまることなく、患者救命後、すなわち、患者がICUを退室し、さらには退院した後の社会生活までを見据えた治療が求められるようになってきています。同じように救命できるなら、さらにより良い方向で社会に還元を、という考えです。この領域における近年の研究成果は目覚ましいものがあり、キーワードは、集中治療中の①適切な鎮痛、②必要最低限の鎮静、③せん妄対策、④早期リハビリテーションです。そして日常臨床における現時点での集大成ともいえるものが、2013年に米国集中治療医学会より公表された「2013 PAD guidelines」であり、また、日本集中治療医学会が2014年に公表した「J-PADガイドライン」です。

本書は、羊土社の「Surviving ICUシリーズ」として企画された、重症患者の「痛み・不穏・せん妄管理」のための臨床ガイドブックです。執筆は、臨床現場で実際にこの領域に取り組んでおられる、わが国のオピニオンリーダーの先生方に、「2013 PAD guidelines」や「J-PADガイドライン」の内容を踏まえた上で、臨床現場で直面することが想定される疑問に対する「現場からのアドバイス」的な解説をお願いしました。対象とする読者層は、これからの日本の医療を支える若手医師および中堅クラスの集中治療看護師を想定しています。「2013 PAD guidelines」や「J-PADガイドライン」には、これまでの固定観念を覆す内容が随所に盛り込まれています。ですから、「今までこのやり方で問題なかったんだから…」という方には向いていないかもしれません。しかし、本書をお読みいただいた皆さんには、是非、今後の集中治療の潮流を理解していただけるものと信じますし、わが国の集中治療の現状で本当は改善が必要な点が多々あることも理解していただけたらと思います。

本書が、重症患者管理に携わる医療者にとって、患者予後を少しでも良い方向に導くための道標になってくれれば幸いです。

Intensive aftercare after intensive care…

2015年1月

布宮 伸